

## ●ウイスキー・ラベル物語-18

スコッチから日本の味を造るジャパニーズ・ウイスキー(1)  
—本格ウイスキーを生んだ鳥井信治郎と竹鶴政孝—

か わい だし  
河 合 忠  
Tadashi KAWAI

今では、世界の5大ウイスキーに数えられるジャパニーズ・ウイスキーであるが、その歴史はわずかに70年余で、筆者がこの世に生まれる2年前に市販された「サントリー・ウイスキー—白札」が最初である。アイリッシュ/スコッチが11世紀に誕生し、アメリカンが17世紀、カナディアンが18世紀後半に造られ始めたのと比較すると、さらに2世紀も遅れて本格的ジャパニーズが誕生した。それに大きく貢献したのは、“ジャパニーズ・ウイスキーの生みの親”鳥井信治郎（敬称略、以下同様）—サントリー株式会社創業者—の本格ウイスキー造りへの執念と“ジャパニーズ・ウイスキーの父”竹鶴政孝—ニッカ・ウイスキー株式会社創業者—によるスコッチ生産技術の直移入であった。



## “黒船”により持ち込まれたウイスキー

日本にウイスキーが持ち込まれたのは、安政元(1853)年、米国海軍の軍艦(“黒船”)で来航したペリー提督が幕府に献上したのが始まりとされている。こうして西洋諸国に門戸を開いた徳川幕府は、安政5(1858)年、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの5カ国との間で就航通商条約を締結した。当時、洋酒はアルコール類に分類されており、しかもアルコール類に対する関税は安いこともあって、洋酒の本格的輸入の下地ができた。

安政6(1859)年6月2日に横浜港が開港し、多くのイギリス人が来日して外人商館が軒を連ねる横浜で、彼らの自家飲料用としてウイスキーが持ち込まれ、日本人にも徐々に洋酒に対する興味が深まりつつあった。しかし、実際に日本人への販売を目的に

ウイスキー輸入が始まったのは明治4(1871)年で、横浜の下町にあったカルノー商会から市販された猫印ウイスキーが最初であるという。しかし、こうした本物のウイスキーや葡萄酒などの輸入洋酒類は一般市民にとってはまさに高根の花(高嶺の花)で、鹿鳴館時代の主役たちのみが享受できた高級品であった。後に、高級品を嗜む庶民の増加とともに、明治35(1902)年には日英同盟締結を機に、スコッチの多量輸入が始まった。



## イミテーションで始まった日本のウイスキー業界

ウイスキーへの市民の願望に目をつけた洋酒輸入商会またはアルコール生産業者によって、値段の安い多くのイミテーション・ウイスキーが横行したのも明治4(1871)年頃からであった。こうした“まがいもの”は、アルコールに香料や色素などを混ぜた混成ウイスキーであったが、しばしば“舶来品”として市販される時代が大正初期までの長い間続いた。ようやく明治維新の一時的混乱期を乗り越えた明治政府がこうした動向を見逃すはずもなく、明治28(1895)年には、古来の日本酒への課税とは別に、「混成酒税法」を交付し、明治29(1896)年3月から導入し、加えて明治32(1899)年にはアルコールに対する税金を大幅に引き上げた。

明治34年3月30日付で法律第8号「酒精及酒精含有飲料税法」を交付し、同年10月1日に施行した。この法律により葡萄酒は果実酒に、洋酒は雑酒に分類され、同法の第4条には、“清酒、濁酒、白酒、味醂、焼酎、麦酒および葡萄酒を以て醸造したる葡萄酒には本法を適用せず」と規定し、ビールにつ

いては別に明治34年法律第12号「麦酒税法」が施行された。すなわち、ウイスキーは分離され、酒精含有飲料として法律第8号の適用を定めたのである。すなわち、日本酒を保護し、イミテーションの抑制を目的に洋酒に対する重税の第一歩となり、この基本的考え方がごく近年まで維持されたのである。当時の法律のどこにも「ウイスキー」の単語は見られず、この状態は昭和15年3月29日法律第35号により酒税法が改正されるまで続いた。



人気商品「赤玉ポートワイン」がジャパニーズ第一号を育む

本格ウイスキーの生産には数年間の熟成期間が必要であり、その間商品販売による収入は全くないために、初期に投入する莫大な資金を調達できる企業であることが前提であった。現在のような株式制度のなかった明治、大正、昭和初期では、会社自ら初期投資のための基金を産み出す必要があった。“ジャパニーズの生み親”，鳥井信治郎は、「赤玉ポートワイン」の爆発的な人気による長期の安定した収入を基にして、本格ウイスキーを日本で造る夢を実現したのである。

信治郎は、大阪市東区で小銭の両替商を営み、後に米屋に転業した鳥井忠兵衛・こまの次男として明治12(1879)年1月30日に生まれた。14歳で、当時大阪商人の家ではごく当たり前のこととして、明治10(1877)年創業の小西儀助商店に丁稚奉公入りをした。小西儀助商店は菓種問屋であったが、輸入した白葡萄酒、ブランデー、ウイスキーなどの洋酒も扱っていた。その商品の中に赤門印葡萄酒があり、後に鳥井が「赤玉ポートワイン」を思いつききっかけとなったと伝えられている。ここで3、4年間丁稚奉公を務めた後、絵具・染料問屋であった小西勘之助商店へ移り、ここではいろいろな原料を混ぜて調合する技術の基礎を学び、後にウイスキー原酒の調合、今で言うブレンドに役立つことになる。

明治32(1899)年、21歳となった信治郎(写真1)は独立して鳥井商店を創立し、葡萄酒や缶詰類を扱い、後に合成葡萄酒(アルコールに香料、色素を混ぜた)を造って販売を始めた。当時、外人商館の1つセレーヌ商会に出入りして、本場の洋酒の味を教わり、彼が一生を捧げた“本物造り”のための味覚と嗅覚を磨くことになる。しかし、スペインの優良

葡萄酒の瓶詰めを売り出すが売れ行きが悪く、それにさまざまな工夫を凝らして遂に「向獅子印」と名づけた甘味葡萄酒を完成したのは明治39(1907)年であった。同年、友人の米穀商西川定義の出資を受けて「寿屋洋酒店」と名を改め、6年間共同経営した。ちなみに、「向獅子印」(図1)は、1989年までサントリー株式会社のロゴや商標として使用された。

明治40(1907)年には、もう1つの葡萄酒「赤玉ポートワイン」を薬用として売り出し、巧みな宣伝も功を奏して爆発的な人気を博し、大正の終わりから昭和にかけて市場の60%を占めるに至った。そ



写真1 鳥井商店開業当時の鳥井信治郎  
(サントリー・ホームページより)



図1 「向獅子印」

現在のサントリーのロゴが新しく作られた1989年まで、「向獅子印」が社章や商標に使われた。獅子が2つのS(ラテン語の Spiritus Sanctus, “聖なる水”, すなわちウイスキーの意)を守っている様子をデザイン化したものである。

れに加えて、寿屋もご多分に漏れず混成ウイスキーである「ヘルメス・ウイスキー」を明治44(1911)年から販売した。こうした好調を背景に、信治郎は大正元(1912)年には独立し、大正3(1914)年には家内工業から脱却して合資会社を設立し、複数の工場を建設して大いに利益をあげたのである。その背景には第一次世界大戦による軍需景気も幸いした。

そうした好景気も長くは続かず、大正7(1918)年には世界大戦後の大恐慌が全世界的に広がり、軍需景気に沸いて乱立した多くの企業が倒産した。しかし、信治郎は良質の製品を維持することにこだわるとともに、巧みな宣伝によって、「赤玉ポートワイン」を中心に寿屋の業績を好調に維持し続けた。

大正9(1920)年には、混成ウイスキーと炭酸を混ぜた発泡酒「ウイスタン」、今で言うハイボールを考え出し、別に尼崎市に設立した新会社の登利寿株式会社から製造販売を開始した。しかし、売れ行きが芳しくなく、後に合資会社の寿屋と合併して、大正10(1921)年12月18日に株式会社寿屋を設立した。

信治郎は「宣伝の鬼」といわれるほど、商品の宣伝にさまざまな新機軸を考え出し、しかもそれらが彼のハイカラ趣味というか、舶来くささが大いに生

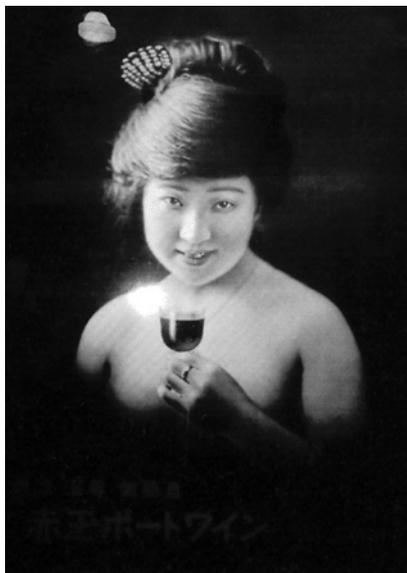


写真2 赤玉ポートワインのポスター  
(大正13年, 1924年)

真っ赤なポートワインの入ったグラスを持った赤玉楽劇団のプリマ・ドンナ、松島美栄子のヌード写真が評判に評判を呼んで大いに人気を博した。ヌードといっても、肩から胸の上をわずかに露出しただけのものであったが、風俗取締りが厳しくなっていた当時としては画期的な試みであった。その後、他社からさまざまなポーズの類似ポスターが試作されたがごとく当局から禁じられたという。

かされたものであった。その1つの例が、短期間ではあったが「赤玉楽劇団」の創設であり、そのプリマ・ドンナ松島美栄子のヌード写真入ポスター(写真2)が実現したのが大正13(1924)年5月1日で、後にドイツの世界ポスター品評会で一等に入選し、寿屋の赤玉ポートワインはますますその人気が高まった。



### 近代の中国にも残っていた「ポートワイン」

寿屋の赤玉ポートワインは、<sup>チンタオ</sup>青島航路を通じて中国にも多量に輸出されていたという。昭和6(1931)年に生まれた筆者が、赤玉ポートワインを飲む機会がなかったのは当然であるが、病弱の父が薬用に1日3度の食前に少量ずつ愛飲していたので、子供心にも「赤玉印」の赤い液体の入ったボトルが記憶の中に鮮明に残っている。

筆者が最初に中国を訪れたのは昭和55(1980)年9月16日であった。当時、自治医科大学に赴任して間もなくであったが、学長補佐を拝命していた関係で、自治医科大学が北京医科大学(当時、北京医学院)と中国医科大学との間で学術交流の調印をするために、中尾喜久学長を団長とする中国訪問団の一員に加わり、上海経由で北京を訪れた。当時の中国では、北京市内でもほとんどの市民が“人民服”を着用し、外国人専用の兌換券紙幣(写真3)があり、日本人一行を多くの市民が珍しげに取り囲む光景が普通であった。また、宴会では高級なマオタイ酒が



写真3 中国で発行された兌換券(昭和54年, 1979年発行)

さまざまな額の紙幣が発行されていたが、ここには5圓紙幣の表と裏を示した。当時、外国人のみが使用し、中国市民は中国人民銀行発行の人民紙幣を使用していた。近代化された現在は兌換券は流通していない。

必ず出されたが、それを飲めない人たちは小さなグラスに唇を触れるだけで、あまり冷えていないチンタオ・ビールを飲む羽目になった。最初の食卓で、今は故人となられた中尾喜久学長が“ポートワイン”を所望され、まさに甘味の強い混成葡萄酒そのものであった。当時は中国でワインを飲む人たちが少なかった中で、中尾喜久学長がなぜポートワインを所望されたのかは不明であるが、戦前の日本の混成洋酒が中国に残っていることにいささか驚いた(写真4)。それ以後、「天安門事件」の真ただ中の北京滞在を含めて合計10回中国を訪問しているが、今の中国は大きく変わり、食卓にはさまざまなワインが並び、特別に所望しないかぎりマオタイ酒が振舞われることはない。この20年余の中国の変わりようには、目を見張るものがある。



#### 関東大震災後の信治郎の大きな賭け

かの有名な関東大震災は、大正12(1923)年9月1日に起こった。もちろん、東京に進出していた寿屋の事務所や営業所は全壊した。大震災を知った信治郎は、大阪や他の地域に散在していた工場や営業所の倉庫を開放して、青島航路に就航していた嘉代丸をチャーターし、救援物資と商品を満載し、しかも東京事務所を再建するための機材と大工達までも乗せて東京に向かわせたのである。もちろん、東京事務所を急遽再建し、営業活動を進めるとともに、救



写真4 ポートワインで乾杯の一行(昭和55年, 1980年)

自治医科大学と北京医学院および中国医科大学の学術交流プログラム調印式のため中国を訪れた際の会食。小さなワイングラスに真っ赤な甘味の強いポートワインが注がれている。ネクタイ着用の左から中尾学長、豊住事務局長と筆者で、中国側の要人はすべて人民服を着用。また、瀋陽から北京に出迎えられた関係者は政府発行の宿泊券を利用し、公用以外の旅行が許されていなかった。

援活動にも力を注いだという。

その1月後、大正12(1923)年10月1日、永年潛に計画を進めていた“冒険”「東洋で初めて本格的なウイスキーを造ろう」を社内に図った、というよりはワンマン経営者であった信治郎による発表があった。寿屋の全資産を賭けるような大事業を始めるについては、社内の全役員はもとより、社外の仲間からも多くの反対意見が寄せられたという。しかし、かねてから物色していた、東洋最初のウイスキー蒸留所建設用地を山崎の地を買収し、直ちに工場建設の準備に取りかかった。

信治郎にとっては唐突な行動ではなかった。前述のように、独立して鳥井商店を設立してから、セレーヌ商会との交流を通じて本物の洋酒の味を覚え、輸入に頼らず日本独特の“本物”を造るという夢を抱いてから、すでに24年を経過していたのである。夢を実現するための資金を貯めるために混成葡萄酒や混成ウイスキーを造ることから始めた。

前述のように、ヘルメス・ウイスキーの製造販売を開始したのは明治44(1911)年であったが、当時の国産ウイスキーがすべてそうであったように、グリーンアルコールに香料やカラメルのような色を加えただけのものであった。

大正8(1919)年、寿屋は「トリス(Torys)」と命名したウイスキーを一時期発売したことがある。あるとき、できの悪いアルコールを葡萄酒の古樽に詰めて、倉庫の奥に置いたまま忘れていた。何年かたって思い出した信治郎は、相当良質のウイスキーに変化していることを発見し、発売したというわけである。しかし、原酒がなくなって、間もなく歴史的トリス・ウイスキーは消滅してしまった。これによって、信治郎は本格ウイスキー製造へ具体的な手がかりをつかんだのである。



#### 単身スコットランドに向かった青年, 竹鶴政孝

明治27(1894)年6月20日、広島県の瀬戸内海に面した竹原町に生まれた竹鶴政孝は、製塩業を先祖から引き継ぎ酒造業も手がけていた竹鶴家の三男であった。酒蔵を遊び場に育ち、酒造りに興味をもった政孝は大阪高等工業学校(現・大阪大学)醸造科に進学し、大正5(1916)年3月に同校を卒業したが、実家を継ぐことなく洋酒に興味をもった。早速、同

窓名簿から知った第一期生の先輩が社長をしている大阪市の洋酒トップメーカー撰津酒精製造所を訪ね、洋酒造りに携わった。撰津酒精製造所は、寿屋の「赤玉ポートワイン」、「ヘルメス・ウイスキー」などの製造を請け負っていた。

入社1年後の大正6(1917)年初春、阿部喜兵衛社長に呼ばれて、突然モルト・ウイスキーの本場スコットランドでウイスキー造りの技術を学んでくるよう要請された。もちろん、スコットランド留学への伝<sup>つて</sup>があったわけではないが、ウイスキー製造技術のメッカへの留学に大きな夢を膨らませた。政孝の両親の落胆は大きく、阿部社長自ら竹鶴酒造を訪ねて熱心に頼み込んだという。時に政孝23歳であった。

翌大正7(1918)年6月29日、神戸港を出発した政孝は、サンフランシスコ経由で葡萄酒造りを見学した後、同年12月、厳寒の英国リバプール港に到着した。持ち前の物怖じしない体当たりで、彼は大阪高等工業学校の卒業証明書を片手に聴講生になるべくスコットランドのグラスゴー大学とロイヤル工科大学(現・ストラスクライド大学)を訪れた。幸いグラスゴー大学の聴講生となることを許され、有機化学と応用化学を専攻するが、日本で学んだ以上の知識を得られず図書館で関係書を読みあさる日々を送っていた。その中に、「ウイスキー並びに酒精製造法」を手にした政孝は、スコットランドのハイランド地方エルギンに住む著者、J.A. ネルトンを訪ねる決意をし、大正8(1919)年4月グラスゴーから汽車でエルギンに到着した。しかし、高額の受講料と紹介料を払えない彼は門前払いとなった。以前にも書いたように、エルギンのあるスペイ川周辺には多くの蒸留所があるが、幸いロングモーン・グレンリベット蒸留所(現・ロングモーン蒸留所)のJ.R. グラント工場長は快く彼の希望を受け入れ、職人と一緒に働く機会を得た。今から86年前、後に“ジャパニーズ・ウイスキーの父”と呼ばれる24歳の政孝は、スコッチ製造技術者としての第一歩を踏み始めたのである。

ロングモーン・グレンリベット蒸留所でのわずか1週間の実習で貴重な体験をしてグラスゴー大学に戻り、運命の出会いを経て翌大正9年1月8日イギリス人の娘リタと結婚した(写真5)。新婚間もなく竹鶴夫妻はキンタイヤ半島の先端にあるキャンベルタウンに出発した。政孝のヘーゼルバーン蒸留所(現在は残っていない)での数カ月間の研修が予定されていたためである。この蒸留所でじっくりとスコッチ製造技術を学んだ政孝が新妻を伴って横浜港に帰国したのは大正9(1920)年11月であった。しかし、竹鶴夫妻を待っていたのは第一次世界大戦後の大恐慌による業績不振で喘いでいる撰津酒造であった。何度となく書き直して提出した「本格モルト・ウイスキー醸造計画書」も実行困難として、撰津酒造は本格モルトの製造計画を断念した。米国では、まさに禁酒法が施行され、世界のウイスキー業界が大きな転換期を迎えていたのである。

大正11(1922)年春、政孝は撰津酒造を退社し、自宅近くの中学で化学教師をし、リタはピアノと英語を教えながらの浪人生活を送っていた。そして、間もなく“ジャパニーズ・ウイスキー生みの親”鳥井信治郎と“ジャパニーズ・ウイスキーの父”竹鶴政孝の運命の出会いが訪れる。



写真5 新婚当初の竹鶴政孝夫妻  
(大正9年, 1920年, ニッカのホームページより)

大正7年神戸港を出発し、サンフランシスコ経由でグラスゴー大学に留学した政孝は1年半後にリタ夫人と結婚した。スコッチ醸造技術を学んで帰国したのは大正9年11月であった。